

〔研究ノート〕

リナルド・リナルディーニ

——ドイツ盗賊小説の原型——

〔一〕

このところ、世界各国で、いわゆる大衆文芸が、単に文学的立場からばかりでなく、社会文化的な立場から、あるいは教育上の効果を考えて、再評価される風潮が生まれてきた模様だ。西ドイツでもこの傾向は著しい。そうしたことから、十八世紀の通俗小説の代表作とされるクリティアン・アウクスト・ウルピウス（一七六二—一八二七）の盗賊小説「リナルド・リナルディーニ」の内容を回顧することは無意味ではないだろう。

この小説が発表された一八〇〇年を中心とする時代はドイツ文学史上のいわゆる黄金時代で、ゲーテ、シラーや初期ロマン派のすぐれた作品が相ついで生まれた。しかし、これらの作品はどちらかといえば、貴族や知識人を対象にしており、一般大衆はもっぱら楽しみと緊張感を読者に与えることをねらった騎士小説や盗賊小説を愛読した。前者は舞台を中世におき、勇敢で正しい騎士と悪い騎士、それに陰險な僧侶が三つ巴になって争い、不気味で超自然的

金 森 誠 也

な事件が次々に発生する恐怖、冒険小説である。これに対し、盗賊小説は、「リナルド」の他、*チェシユケ*「アベリーノ」、*クラマー*「ヘスベラ・シユバード」がその代表作だとされているが、いずれも舞台をイタリアの山中とか地中海の島々とか、ドイツを遠く離れた異境にしている。それは、どんなに異様な出来事や風俗を描いても教養豊かとはいえない貸本屋の愛読者に虚構を見破られるおそれがないこともさることながら、日常の現実^{（ト）}に飽き飽きしている大衆のもつロマンチックな異国趣味を十分に満足させることができたからである。

ところでこれらの盗賊小説のヒーローはいずれもシラーの「群盗」の主人公カール・モーアのように泥棒とはいえ、民衆に愛される高貴な性格の持主であり、社会の悪をこらしめるために敢然と立ち向かう勇士という点で共通している。とりわけ、ウルピウス描くところのリナルディニは立居振舞いがスマートであり、女性に愛され、悪者には違いないが義賊的な風格があり、人気を集めた。

作者のウルピウスもおのれの創造したヒーローを愛しており、その証拠に彼は自分の息子をリナルドと命名した。それにこの小説の舞台がもっぱらイタリアであったことは、前述の理由の他におのれの尊敬する義兄弟、つまり文豪ゲーテがイタリアをこよなく愛し、ウルピウスを含め、親しい人たちにしばしばイタリア旅行の思い出を語っていたこととも無関係ではなさそうだ。

ウルピウスはヴァイマルの生まれで、イェナ、エアランゲンの各大学で法律を学んだが、二十四歳の時、父を亡くし、自活の道を求めた。はじめは雑文を書き、あるいはさる貴族の個人秘書などをつとめたが、うまくゆかず、一七八八年、イタリアから帰ったばかりの枢密顧問官ゲーテに就職を依頼すべく、使者として妹のクリスティアーネを差し向けた。これはゲーテの一生にとっても、さらにドイツ文学史全体にとっても、きわめて重要な出来事であった。

ゲーテにとって、プラスであったかマイナスであったかについてはともかく、彼は、二十そこそこの造花工場の女工、クリスティアーネにすっかり魅了され、まもなく彼女と同棲、やがて正妻とするようになったからである。

ゲーテは恋人の兄、ウルピウスの才能にも着目し、特にヴァイマルの宮廷劇場に上演される演劇やオペラ作品を脚色するといふ重要な仕事を世話してくれた。それはモーツアルトの「魔笛」など四十三作品に及んだが、ウルピウス脚色の台本はライプチヒ、ベルリンなどの劇場でも採用された。また、彼はフランスやイタリアのオペラ台本を平易なドイツ語に翻訳した功勞者でもある。⁽²⁾

さらに彼は一七九七年以後ヴァイマルの図書館に勤め、司書となったが、その間、小説を執筆し、特に「リナルド・リナルディーニ」は好評を博した。最終的には一八〇〇年、この五百数十頁に及ぶ長編小説が刊行されるやいなやドイツの一般大衆に愛読されたばかりか、英仏語はもちろんへブライ語まで各国語に翻訳されるようになった。もっとも当時は現在のような印税の制度が確立されておらずいくら人気作家になっても、懐具合がそれに比例してよくなるわけではなかった。⁽³⁾

〔二〕

「リナルド・リナルディーニ」はおおよそ三つの部分に分れている。まず、最初の舞台は中部イタリアで三十歳前後のリナルドが部下を率いて、警官や民兵と争う戦闘場面が多い。彼ら群盗はトスカーナ、教皇領、ナポリ付近などの金持、それも主として旅行者を襲って掠奪しながら居所を転々としている。しかしリナルドらは奪った金品を全部

おのれの懐に納めるのではなく、一部を貧しい者、虐げられた者に与えてやるという、ちょうど日本のねずみ小僧のような義賊で、民衆の評判は悪くない。それにリナルドの定めた規律は厳しく、たとえ貧しい身寄りのない老人から金品を掠奪した部下を射殺こそしないものの刑罰として大怪我をさせる。また、こんな話もある。

リナルドがひそかに愛しているアウレリアというマルタの騎士の娘がさる男爵に嫁いだ。だがアウレリアはサディストの夫に虐待され、夫の友人や夫が囲っている下品な女たちが集まった宴席でなぶりものにされる。彼女の運命を心配し、男爵の居城に潜入したリナルドはその有様を目撃する。しかも男爵の仲間のあるフランス人は時のヒーロー、リナルドが話題にのぼったとき「あんな男は去勢してやる」といきまわく。これを聞いたリナルドは部下を率いて、ただちに宴席にのりこみ、男爵を叱責し、アウレリアを連れ出して彼女が望む修道院に入れてやる。また、無礼な発言をした例のフランス人を逆に去勢してしまう。

なんとも乱暴、残忍な話でリナルドには、怪盗アルセーヌ・ルパンのようなユーモアのセンスは欠除していたようだ。しかしリナルドは美しい女にはことのほかやさしく、思いやりがある。それにギターを奏でながら、詩を歌う術にたけており、あまつさえ悪をこらす美男義賊ということで多くの女たちはめぐりあわないうちから、彼に夢中になってしまう。ジプシーに加わっていた、さすらいのキリスト教徒の娘ロザリエもジプシーと別れ、リナルドにハウスキーパー役として仕えるようになって以来、彼に愛情を抱き、病気で若死するまで、辛い流浪の生活を物ともせず、彼に奉仕する。ロココ文学によく登場する好色で、淫乱なヴィーナス型の女とはまったく対照的な、愛する男性のためには一切を投げ出すタイプの女、ワグナーのオペラでいえば、さまよえるオランダ人の恋人センタや、タンホイザーを改心させたエリーザベート、ゲーテ「ファウスト」のグレートヒェンに似た清純な女といってもいいだろう。

〔三〕

第一部にあたるイタリア本土におけるリナルドの行動は主として戦闘と逃亡である。ところが彼が官憲の追及を逃れ、シチリア島へ逃亡すると、シラーの「群盗」の主人公、カール・モアからドン・ファンに変身する。シチリア島は面積約二万八千方キロ、地中海最大の島だ。ゲートのイタリア旅行のなかでもシチリアめぐりは独特の趣きがある。ゲートは古代文明や芸術への感情移入もさることながら、野性味あふれるこの島の中で、人間性を發揮して自由に暮らしていたように思われるからだ。たとえばカリオストロと親交のあるイギリス人旅行者といつわって、この大イカサマ師のパレルモにある留守家族とねんごろになる場面など、ゲートのメフィスト的ブラック・ユーモア感覚が南欧に来て一時に開花したように感ぜられる。青い空、地中海、火山、異様な古代の遺跡などもこうした解放された気分背景となったのだろう。

ウルピウスが「義兄弟」ゲートから、どの程度シチリアの印象を教えられたかはわからない。しかし小説では主人公リナルドがシチリアに渡り、貴族と名乗って変装して各地を遍歴し、貴婦人たちとたわむれた模様は、いかにも自由奔放な解放感を与える。大勢の部下をつれ、官憲の追及を逃れつつイタリア半島の山中をさまよっていたリナルドとは別人のようである。シチリアではゲートのようにリナルドも変身するのだ。

シチリアではもっぱら情事が主題となるがリナルドが会う女性としてはまず、オリンピアがいる。彼女はロザリエとは対照的なコケティックな女である。美女で誘惑術にたけた彼女は政治活動にもとりくみ、それでいて家事、料理

もうまく、リナルドも一時心を動かされるのだが、宿舎である秘密結社からのメッセンジャーボーイと同衾している場面を目撃して以来、熱もさめ、すっかり彼女を敬遠するようになる。

リナルドの妻となった女もいる。それは伯爵の未亡人ディアノーレである。彼女もどちらかといえば、つましい良妻賢母型である。ただ、変装したリナルドを心やさしい放浪の貴族と信じていただけに、実は彼が群盗の隊長だと知って、失神するほど驚愕し、彼との間にできた子供を連れ、亡夫の一種の情婦だったヴィオランテという女と共にリナルドからの逃避行をはかる。

リナルドは牧童だったがイタリア全土を震駭させた大泥棒団の頭目となる。彼の力量、才能、用兵の巧みさは定評がある。そこで、シチリアの反政府分子や地方の盗賊、それにコルシカ島解放をめざす秘密結社などから始終仲間にならないかという誘いがかかってくる。なかでもコルシカ解放団体は特にしつこく勧誘する。フロンテヤの老人といわれるこの団体の首脳者は政治活動にはげむとともに秘儀に通じている。インカの神、創造主ヴィラコチアを奉ずる彼は、妖術も行ない、たとえば、遠方の人々の姿を映像として鏡面に写し出すというテレビのはしりのような技術も披露する。そのくせ、老人はいささか功利的な一種の生の哲学を保持している。それによると「人間社会の義務は不断の連続する交易である。お前は利益をもたらす見込みのない物事にかかずらわってはならない。お前の分別、お前の洞察、お前の仕事に対する熱意、お前の親切な行爲、すべては他人との交易にかかっている。お前の隣人に対して損害を与えてはならない。そうする必要があるなら彼らを尊敬しなさい。できるものなら隣人に奉仕しなさい。彼らの要求を認め、彼らの弱点を許しなさい。彼らはかならず感謝するだろう。お前の出費は再びかなりの利潤をとまってもどってくるのだ。……たしかに友情も大切である。だが、友情はもっとも美しく、しかももっとも危険な天か

らのおくりものである。その善さはまさに魅力的であるが、その常ならぬ有様はおそるべきものである。それを失えば、一生涯、苦汁に満ちた思いをしなければならぬという危険にさらされているのに友情に頼るなど賢人のすることであろうか」⁽⁴⁾。

このような堅実で実用的な見解をもつ老人が仲間の結束を基本とするロマンチックな群盗の生活などは認するはずはない。老人はリナルドに対し、「泥棒の頭目などになって、いくら氣勢をあげても、いずれは流れ弾にあたって死ぬか、捕えられて拷問にかけられ、処刑されるばかりだ。それよりもいっそフランスの圧迫からコルシカを解放する英雄として余生を送った方がよいではないか」と忠告する。

リナルド自身も群盗の生活のはかなさを常に意識しており、仲間たちにもこんな悲観的な意見を述べている。「われわれには、けっして、妻や家庭や炉端が与えられない。子供を養ってゆくこともできない。たとえ子供ができたとしても、どうすればいいのだ。われわれと同じ仕事につかせるのか？ われわれはわが子を世の中に送りこむことはできない。しまいには処刑されることがわかっているのにわれわれは子供を養育するの⁽⁵⁾か？」

こうした悲観論を抱くリナルドは、どうしても老人の忠告にしたがうことができない。民族解放の英雄に捧げられる月桂樹でけっしておのれの頭を飾るわけにはゆかぬとって再び、もとの泥棒稼業にもどってゆく。

〔四〕

この小説の最後の三分の一程はリナルドがシチリアからサルジニアに赴き、そして再度シチリアにもどり、ついに

あえない最期をとげるくたりである。

サルジニア島はシチリア島につぐ地中海第二の巨島で、面積は約二万四千平方キロ、全体に山がちだが、海の美しさは定評がある。先史時代の遺跡もある。ウルピウスは訪れたわけはないが、なぜかイタリヤ本土やシチリアよりも熱心にこの島の民俗的な記述にとりくみ、ある村のお祭り風景について次のように記している。

「近隣の都市や農村、城や山小屋から大勢の人々がこのリエントッ草原で開かれた市にくり出してきた。買い手に売り手、聖職者に巡礼、貴族に貴婦人、農夫、ジプシー、それに拘摸すくもがまるでカーニバルのように入りみだれ、渾然一体となってあたりをさまよっていた。物の売り買いや飲食がさかに行なわれるなかで、サルジニア特有の笛の音がひびき、チターやトリアングルが奏でられ、踊り手は楽しげに大地を踏みならして舞った。そこに美しい天幕が張られ、上流階級の人々がその中にみこしをすえた。炉の火が燃えあがり、サルジニア島人の舌と胃を刺激する盛りだくさんのたべものを煮こむ鍋が湯気を立てた。急ごしらえの板でおおったバラックや緑色をした小屋の中では酒宴がまさにたけなわであった。聖クラウディアの礼拝堂の中ではミサが行なわれ、花が捧げられると免罪が人々に申しわたされた。木製の舞台の上では、田舎医師が薬草、膏薬や精油を売りさばき、その間、彼の宣伝係の男が笑い話を聞かせてはお客を楽しませ、つづいてその恩恵にあずかるべく欧州全土の王公がわれもわれもとばかりに費用を出したという効果観面の治療法についても語った。また別の場所では、三文詩人がへたくそなバラードを披露し、その近くにフランチェスコ派のやせた修道僧がまだ救われていない魂のため、ミサをあげてしんぜようと呼びかけた。ひとことでは、激しく動揺する多彩な世界がこの草原市の中に集約されたようであった。」

ここにリナルドが登場するわけだが、こうした市の描写にも作者が読者の関心を少しでも引きつけようと努力して

いる態度がうかがわれる。実際にはこのくだりは作者がよく知っているドイツの田舎町の市場風景の再現かもしれないが、それは読者にとってはどうでもよかつたことであろう。民衆的な躍動する世界が感ぜられさえすればよいのだ。

ところで、リナルドはサルジニアに在る間は悲痛な状況に陥る。まずコルシカ解放をめざす人たちが——リナルドは加盟を約束したわけではないが彼らには親近感を抱いていた——フランス政府の差し金で一斉に逮捕されたのだ。そこでリナルドはサルジニアから去り、どこかの孤島で静かに人にかくれて暮したいという気持を捨てて、再び群盗の頭目になり、シチリアに舞い戻る。

ここでは、リナルドはおのれの出生の秘密を知ったばかりか両親と子供にめぐりあう、という劇的な体験をする。彼がふとしたことからある城の中で、一人でかくれ住んでいた老女にあうと、それが実の母親であることがわかり、それに続いて、例のフロンテヤの神秘的な老人が実の父親であることが判明する。それこそ二十数年ぶりの夫妻、親子の対面という場面を迎えたわけだ。これにより、リナルドは実は自分は貧農の子供ではなく、母はイスラムの高官の血をひく女、そして父はイタリアの貴族で、今は秘密結社を組織する哲人であることを悟るのである。またリナルドは妻ディアノーレがかくれ住んでいる城の近くで実の息子にめぐりあい、さらに妻とも涙の対面をする。

しかし、時すでに遅く、リナルドはまもなく官憲の手入れを受けて射殺される。

〔五〕

以上のあらずじから見ると「リナルド・リナルディーニ」はまったく荒唐無稽な物語のように思われるかもしれない。とりわけ、純文学のみを尊重する立場からすれば、このような通俗小説は論ずるに値しない愚作ということになるであろう。

それはさておき、近年、日本では、いわゆる大衆文芸の分野でもたとえば山本周五郎「樅の木は残った」、司馬遼太郎「空海の風景」など、内容的に高度とされる作品が次々に発表されるに当たって、いまさら大衆文芸だ純文学だと区別し、両者に文学的な価値の高低があるように主張するのは意味ないという意見が有力になった。また、西ドイツでも大衆文芸たりとはいえ、いや大衆文芸なればこそ、それぞれの描かれた時代の一般大衆の心情や人生観が如実に反映されていると評価する傾向が現れており、通俗小説が「国語」の教材として用いられるケースが多くなったという。東ドイツでもSF小説は人気を博しているようである。

それであっても、やはり純文学と大衆文芸との相違は存在しているとみななければならぬ。十九世紀最大の哲学者の一人、アルトゥール・ショーペンハウアーは、仲が悪い実の母親ヨハンナが大量生産の通俗小説家であったこともあずかって、大衆小説全体に対して、次のような、きわめて激しい採点をしている。

「小説は内面的生活を多く、これに比べて外面的生活を少なく書くにしたがって、ますます高級かつ気品のあるものになる。また、この関係は特徴的な目印として、小説のすべての段階に、上はスターンの『トリストラム・シャンディ』から下はきわめて粗雑でアクションばかり多い、騎士小説、盗賊小説に至るまであてはまる……くだらない小説では外面的生活がそれ自身のために存在している。だが、そもそも芸術は外面的生活についてはできるだけ少量の消費をもってして、内面的生活をできるだけ強力に展開するところに意義がある。なぜなら内面的生活こそ、われわ

れの知性の本来の対象だからである。小説家の課題は大きな出来事を物語ることでなく、小さな出来事を興味深くさせることである⁽⁷⁾。

このようなショーペンハウアーの見解にのつとれば「リナルド・リナルディーニ」などはくだらない通俗小説の代表作品とされても仕方がないだろう。リナルドはイタリア半島、シチリア島、サルジニア島を股にかけ、盗賊の隊長として、はたまた、にせ貴族として、戦闘、恋にあぐれ、まことに多様な生活をしているが、彼の内面の描写はきわめて少ない。彼がそもそも盗賊になった動機についても、青年将校になったとき上官に不服従のかどで懲戒免職処分を受けたのを怒り、いかにもイタリヤ式の方法で上司を刺し殺し、逃亡した、とわずか二、三行で片付けている。

ドストエフスキー「罪と罰」やシラー「群盗」と比べるのは酷だとしても、シラーの盗賊小説「Der Verbrecher aus verlorner Ehre」(名譽を傷つけられて犯罪者になった男)と比べるとその差がはっきりする。シラーの小説は、わずか二十数頁の短編ながら、一人の農村の純朴な青年が密猟が発覚し処罰されたのを契機として泥棒の群に入り、大犯罪者になるまでの内面心理の変遷をきまかく描いており、ショーペンハウアーでも絶賛するような深味のあるすぐれた作品となっている。シラー自身もこの作品のなかで、「われわれにとっては犯罪者の行動よりも彼の思考の方が彼の行為の結果よりも彼の思考の源泉の方がはるかに重要なのだ⁽⁸⁾」と述べている。

それでは「リナルド・リナルディーニ」が無価値な作品かというところを、そんなことはない。この小説には深刻な心理描写が少ないかわりに波乱万丈な場面が相つぎ、読者に退屈を感じさせない。また、ヴァイマルの劇場でオペラの脚色をしたウルピウスにはドラマの手腕があったためもあるう、随所に出てくる登場人物の会話は軽妙であり、機智に富んでいる。とりわけ、リナルドが貴婦人、田舎娘を問わず女性を口説くときの相手とのやりとりは興味深い。

また、イギリスの「恐怖小説」の影響を受けたせいもあるが、古城の土牢の中に美女が閉じこめられていたり、寝室の枕元に亡霊が登場するなど、怪奇小説流の緊張感にも事欠かない。

それに「長編」ということが重要である。当時から一般大衆はなにも教養や知識を獲得するためにのみ通俗小説を読んだのではない。むしろ長時間にわたって精神を緊張させ、感情を昂奮させながら相手をしてくれる書物を欲したのである。

そうした意味合いからも、当時の長編通俗小説は単に文学作品であるばかりか今日の映画や連続テレビ小説のような役割をも果たしていたに違いない。もちろん今日のドイツでも「リナルド・リナルディーニ」流の小説は、コンザリーク、ジンメルらのベストセラー作家に継承されている。SFあり、スパイ小説あり、推理小説ありで、その内容は豊富であり心理描写も巧みである。

しかし大衆の生活必需品であるという意味では一八〇〇年頃の通俗小説の方が比重は大きかったのではなからうか。これらの小説は逆に当時の一般大衆の好みやくせを知る上でも価値がある以上、「文学」以外の、たとえば「民俗研究」の面から研究する必要もあるのではなからうか。

- (1) Walter Rehm: Geschichte des deutschen Romans I, Vom Mittelalter bis zum Realismus. 1927 Berlin.
- (2) Karl Riha: Der Roman vom Räuber Rinaldini—sein Autor, sein historisches Vorbild, seine Wirkungen. 1980 Frankfurt am Main.
- (3) Wilhelm Bode: Goethes Sohn. 1918 Berlin.
- (4) Christian August Vulpius: Rinaldo Rinaldini der Räuberhauptmann, Inselaschenbuch. 1980 Frankfurt am Main.

- (5) (4)と同じ。
- (6) (4)と同じ。
- (7) Arthur Schopenhauer. 「存在と苦悩」金森誠也訳編、一九六八年。
- (8) Friedrich Schiller: Ausgewählte Werke Zehnter Band. 1867 Stuttgart.